

## 81 誌上発表

## 喉痺について

三浦 喬

日本鍼灸研究会

## 1. はじめに

「のど」は、漢語では「喉」「咽」「唃」のほか、「咽喉」「喉咽」「喉唃」「喉嚨」などとも表現される。これらは同義の言葉として使われる一方、それらの間に一定の区別があったことは、『素問』太陰陽明論の「喉主天氣，咽主地氣」、『靈樞』憂恚無言篇の「咽喉者，水穀之道也。喉嚨者，氣之所以上下者也」によっても明かである。

喉の病證は中国でも古代から重視されている。魏晉以前の医書には、「喉痺」「喉塞（唃塞）」「咽腫（唃腫）」「喉阶」「喉咽乾燥（唃乾）」「喉唃中鳴」などが見られる。このうち、最も多く見られるのは、咽喉部の腫れや痛みの病証の総称である「喉痺」である。『素問』陰陽別論には既に、喉の病の機序を述べた「一陰一陽結，謂之喉痺」の一節も見られる。

病證やその機序が体系的に記載されるようになる隋唐以降、喉の病の認識は格段に深まる。例えば『諸病源候論』では、様々な病門を立てて、これを論じるようになる。更に南宋の『三因極一病證方論』（以下『三因方』）では、内因、外因、不内外因の三因を立てて詳論する。その結果、喉の病證は病機と病因を弁別され、飛躍的にその数を増すことになる。『中医大辞典・第2版』（人民衛生出版社、2004年）に見られる喉丹、喉風、喉節、喉白、喉閉、喉関、喉声、喉疔、喉杵、喉刺、喉鳴、喉腫、喉单、喉咳、喉瘡、喉珠、喉莽、喉核、喉證、喉癰、喉疔、喉癰、喉球、喉菌、喉痒、喉痧、喉蛾、喉腥、喉瘡、喉腐、喉癭、喉瘤、喉癬などは、ほぼ宋代以降のものである。

今回は隋唐以降の二つの医書『諸病源候論』『三因方』によって、喉痺の症状、病機、病因、脈状について考察する。『諸病源候論』は『東洋医学善本叢書』第6冊所収本、『三因方』は『東方医学善本叢刊』第4冊所収本を使用した。

## 2. 結果

『諸病源候論』では、「喉痺」は、卷一・偏風候、卷二・風頭眩候、卷七・傷寒厥候、卷十四・咳嗽候、卷二十四・冷注候、卷三十・喉痺候、馬喉痺候、狗咽喉候、卷四十八・小兒雜病諸候四の喉痺候、馬痺候の10篇である。一方、『三因方』では、卷五・六氣時行民病證治、卷十二・内因咳嗽證、卷十三・肺癰證治、卷十六・咽喉病證治の4篇に見られる。症状は「痒み」「痺れ」「痛み」「喉の熱の発生」「閉塞」「発熱」などで、気の上逆により喉に熱を持つことで生じる諸症状が記載されている。病機・病因は、「風」「傷寒」「咳嗽」「冷注」「喉腫塞」「風毒」「小兒風毒」「少陽相火」「肺癰」「内因（喜）」が挙げられている。『三因方』六氣時行民病證治では『素問』六元正紀大論の一節をほぼそのまま引いて、寅申の年の三之氣に主氣と客氣がともに少陽相火となることを、主な原因と述べているが、これは少陽相火の熱を病因とするものである。熱を喉痺の重要な病機とする見方は、例えば『諸病源候論』咳嗽候の「乘夏則心受之，心咳之状，咳則心痛，喉中介介如哽，甚則咽腫喉痺」や、『三因方』内因咳嗽證の「喜傷心者，咳而喉中介介如腫状，甚則咽腫喉痺」からもうかがえる。これは、「洪」「大」「促」「長」「數」など、熱と親和性の高い陽性の脈状が挙げられていることとも呼応する。

## 3. まとめ

喉痺の主たる病機病因に、先ず「風」が挙げられる。「風」は熱を巻き起こして、腎と関わりの深い喉を侵襲するからである。また「傷寒」や「冷注」などによる気の滞りから熱を生じ発症することもある。「風」であれ「傷寒」であれ、それが強い熱を惹起すれば、喉痺の可能性が高まるが、実際に喉痺にまで至ることは稀である。逆に言えば、喉痺の発生は、その病態自体が深刻な状況にあることを意味する。『諸病源候論』小兒雜病諸候の喉痺候に「若毒入心，心即煩悶懊惱，不可堪忍，如此者死」とあるように、小兒の喉痺は一層重篤であり、そこに至るまでに治療を施す必要がある。